

京都大学

# 生態学研究センター・ニュース No. 56

京都大学生態学研究センター

〒520-2113 滋賀県大津市上田上平野町字大塚 509-3

Tel: (077) 549-8200

Fax: (077) 549-8201

Homepage: <http://ecology.kyoto-u.ac.jp>

センター長 和田英太郎

Center for Ecological Research  
Kyoto University  
Kamitanakami Hirancho,  
Otsu, Shiga, 520-2113, Japan

## 目次

- 京都大学生態学研究センター運営委員会  
(第23回)議事要旨
- 京都大学生態学研究センター協議委員会  
(第32回)議事要旨
- 公開セミナーのお知らせ
- 秋本君・大音君の思い出を語る会のお知らせ
- COE研究員の移動
- 公募研究会のお知らせ
- 新センター員の紹介
- センターを去るにあたって 安井行雄  
奥田 昇  
山田佳裕
- 国際シンポジウムの報告
- 1998・99年度協力研究員追加リスト
- 編集後記
- 今後のスケジュール

## 京都大学生態学研究センター

### 運営委員会(第二十三回)議事要旨

日時: 1998年12月17日(木) 11時05分~12時05分

場所: 京大会館 212号室

出席者: 運営委員 21名、幹事 1名

議題:

1. 生態構造研究部門助教授の選考報告  
人事選考委員会の堀委員長が応募者 23 名（うち 1 名辞退）の中から候補者として 2 名を推薦し、投票による委員の意見分布を得た。

報告事項：

1. 大学院生事故について  
議長が事故報告および捜索等の協力に対するお礼を述べた。
2. 概算要求について  
センター時限に向けての概算要求の作成のためのワーキンググループを作り、1) 国立地球環境研究所（仮称）、2) 環境学研究科（仮称独立研究科）、3) 改組後のセンターの関連を考慮しながら検討する。
3. 科学技術振興事業団「戦略的基礎研究推進事業」の採択  
1) 研究課題「熱帯林の林冠における生態圏－気圏相互作用のメカニズムの解析」  
2) 研究期間「平成 10 年 10 月～平成 15 年 9 月」までの 5 年間  
3) 研究経費「5 年間で約 5 億円」  
上記事業が採択された。マレーシア国ボルネオ島サラワク州クバ国立公園に高さ 70m の林冠観測クレーン（平成 11 年 11 月完成予定）を設置し、新プロ研究と連携して実施する。

（文責：安部琢哉）

---

## 京都大学生態学研究センター

### 協議員会(第三十二回)議事要旨

日時：1998 年 12 月 18 日（金）11 時 00 分～11 時 55 分

場所：京大会館 105 号室

出席者：協議員 14 名、幹事 1 名

- 議事に先立ち、川端（7 月 1 日就任）、大串（11 月 1 日就任）、宮崎（12 月 1 日就任）、大野（12 月 1 日就任）新委員の紹介が行われた。

議題：

1. 生態構造研究部門助教授の選考  
議長が人事選考委員会と第 23 回運営委員会の審議経過を報告し、候補者を推薦した。研究業績の紹介後、投票により、中野繁氏（現北海道大学苫小牧演習林）を選出した。

報告事項：

1. 大学院生事故について  
議長が事故報告および捜索等の協力に対するお礼を述べた。
2. 概算要求について  
センター時限に向けての概算要求の取り組みを報告をした。
3. 科学技術振興事業団「戦略的基礎研究推進事業」の採択  
1) 研究課題「熱帯林の林冠における生態圏－気圏相互作用のメカニズムの解析」  
2) 研究期間「平成 10 年 10 月～平成 15 年 9 月」までの 5 年間  
3) 研究経費「5 年間で約 5 億円」

上記事業が採択された。マレーシア国ボルネオ島サラワク州クバ国立公園に高さ70mの林冠観測クレーン（平成11年11月完成予定）を設置し、新プロ研究と連携して実施する。

（文責：安部琢哉）

---

## 公開セミナーのお知らせ

### Biodiversity and ecosystems processes: spatial and trophic considerations

[Date]

16-19 March, 1999 (open symposium :16-17 March)

[Place]

Shiran-kaikan (a Kyoto University), Kyoto

[Organizers]

Simon Levin (USA), John Lawton (UK) & Masahiko Higashi (Japan, hosting)

[Time table]

One full presentation for 50 min. (= 35-40 min. talk + 10-15 min. discussion).

The titles of talks listed below are tentative.

Day 1:

Hal Mooney (USA): Biodiversity and ecosystem processes: Open questions

Stephen Hubbell (USA): A new theory of biogeography

Simon Levin (USA): Space and the maintenance of biodiversity

John Lawton (UK): Trophic interactions and ecosystem processes

Hefin Jones (UK): Trophic interactions and ecosystem processes in the below-ground system

Masahiko Higashi (Japan): Trophic interactions in space

Evening: reception

Day 2:

Experimental approaches to biodiversity and ecosystem processes: David Tilman (USA)

Andy Hector

Doug Deutschman (USA)

Takuya Abe (Japan)

The critical challenges: Steve Pacala (USA)

Responses: Henry Horn (UK), Takayuki Ohgushi (Japan), Charles Godfray (UK)

問い合わせ先：

京都市左京区北白川西町

京都大学生態学研究センター

東 研究室

ワークショップ事務局

FAX:075-753-4254

e-mail: higashi@ecology.kyoto-u.ac.jp,

kitamura@ecology.kyoto-u.ac.jp

秋本君・大音君の思い出を語る会が  
平成11年3月5日（金）に行われます。

第一部 理学部1号館5階 大講義室  
（午後1時～4時）

第二部 理学部2号館218号教室（懇親会）  
（午後4時より）

### COE 研究員の移動

1998年度 COE 研究員の安井行雄氏は、'98年12月でセンターを退職し、環境庁国立環境研究所へ赴任されました。

### 🍓 🍓 🍓 公募研究会のお知らせ 🍓 🍓 🍓

#### 水循環と植物の関わり - 水の安定同位体比を用いた研究 -

代表者: 松葉谷 治 (秋田大学工学資源学部)

日程 : 1999年3月12日 13時-13日 14時

場所 : 京大大学生態学研究センター (大津市上田上平野町)

JR 京都駅より、JR 琵琶湖線普通で 17 分瀬田駅下車、帝産バス滋賀医大行きで 20 分、終点より徒歩 20 分。タクシーなら瀬田駅より 15 分くらい。センターへの道順の詳細はセンターホームページをご覧ください。

#### 話題提供予定 :

辻村真貴 (愛知教育大学)

「チベット高原における地中水の挙動と安定同位体比の変動」

沼口 敦 (東京大学気候システム研究センター)

「GAME-Tibet で観測された降水同位体変動」

中尾正義 (名古屋大学大気水圏研)

「湿潤積雪の変態に伴う分別 (仮題)」

栗田直幸 (東京工業大学環境理工学創造専攻)

「シベリアにおける降水の安定同位体比の分布」

松葉谷 治 (秋田大学工学資源学部)

「土壌中における鉱物と水の間での同位体分別」

川原谷 浩 (秋田大学工学資源学部)


「土壌水分の蒸発に伴う酸素・水素安定同位体分別」

開発一郎 (広島大学総合科学部)


「地表面水フラックスの測定に関する基礎と最新の情報（仮題）」  
谷口真人（奈良教育大学地学教室）  
「酸素・水素安定同位体を用いた琵琶湖湖底湧出地下水に関する研究」  
杉本敦子（京大大学生態学研究センター）  
「東シベリア、ヤクーツクにおける降水の同位体観測」  
杉本敦子（京大大学生態学研究センター）  
「ヤクーツクにおける土壌水の起源と植物の水利用」  
壁谷直記（京都大学大学院農学研究科）  
「桐生試験地における同位体水収支（仮題）」  
壁谷直記他  
「土壌、植物からの水の抽出法について問題点など」  
沖 大幹（東京大学生産技術研究所）  
「広域水収支解析（仮題）」

問い合わせ先：杉本敦子（京大大学生態学研究センター）  
email：atsukos@ecology.kyoto-u.ac.jp

---



## 新センター員の紹介



### テントウムシ5万匹にマークをした

#### 大串隆之

1998年11月1日付けで生態学研究センターに赴任しました。前任地は北海道大学低温科学研究所です。センターでは熱帯生態研究部門担当ですから、名前から判断すると随分遠くへ来たものです。

大阪の街中に生まれました。周囲は自然に乏しく、シティーボーイとして育ちました。京大農学部林学科では森林生態学研究室に所属し、卒業までに5年かかりました。大学院は農学部昆虫学研究室です。ここでは、一昨年秋に不慮の事故で亡くなった井上民二さんと机を並べたこともあります。大学院入試では見事に不合格でしたが、入試問題の中に不適切な個所があることが後に発覚し、擦った揉んだの末、英語が基準点に達している受験生はすべて合格という前代未聞の出来事により、正式に大学院生として迎えられました。

大学院ではアザミを寄主植物にしているコブオオニジュウヤホシテントウ（現在は、ヤマトアザミテントウという名前になっている）の個体群動態を研究テーマに選び、早春から晩秋まで滋賀県北部の朽木村に下宿をして調査を続けました。テントウムシの背中にラッカーペイントで個体ごとに背番号をつけるという野外調査を朝から晩まで毎日行いました。以来7年間、気づいた時にはマークした個体は5万匹を優に越えていたのです。

さて、5万匹の成果により、次のようなことがわかりました。

（1）密度依存的な個体数調節機構により、テントウムシ個体群は資源量に対する動的平衡状態が維持されている。

（2）個体数の調節機構は、食物資源の質に反応した卵吸収と産卵密度の高い株を避けるメス成虫の産卵行動であり、繁殖率の密度依存的な低下をもたらす。

（3）このような産卵戦略は、時間的・空間的に変動する植物資源の効率的利用を可能にしており、個体の生涯繁殖成功度を高めるという適応的意義を持つ。

この研究の意義は（1）個体群調節の具体的なプロセスの解明と、（2）個体の適応的形質と個体群動態を結びつけたことです。本研究の内容については、1990年の国際生態学会シンポジウム、1994年のアメリカ生態学会シンポジウム、1996年の国際昆虫学会シンポジウム、

1997年のイギリス昆虫学会シンポジウムで招待講演を行いました。これらのシンポジウムでの講演内容は、以下の単行本として刊行されています（購入して決して損はない内容です）。

M.D. Hunter, T. Ohgushi & P.W. Price (eds.), *Effects of Resource Distribution on Animal-Plant Interactions*, Academic Press, San Diego, USA (1992).

Cappuccino, N. & Price, P.W. (eds.), *Population Dynamics: New Approaches and Synthesis*, Academic Press, San Diego, USA (1995).

Dempster, J.P. & McLean, I.F.G. (eds.), *Insect Populations: in Theory and in Practice*, Chapman & Hall, London (1998).

1983年に学位を取りましたが、当時は今とは比較にならないほど就職難で、1988年によく滋賀県立短期大学農業部に職を得ました。大学院で本格的に研究を始めてから、12年目のことです。



「滋賀県立短期大学」にて

滋賀県立短期大学農業部（今はもうありません）はセンターの近くの草津駅前にありました。ここではテントウムシの生活史形質の研究を続けるとともに、新たに種子昆虫と植物の関係に手を染めて、ドングリを10万個拾いました。拾ったドングリを1個ずつフィルムケースに保管しておいたので、実験室がフィルムケースであふれかえていたことを覚えています。膨大なデータが手許に残っています。この頃、重点領域研究「地球共生系」のプロジェクトに加

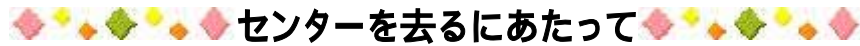
わり、個体群アプローチによる、植物と昆虫の相互作用について考え始めました。とくに、植物の形質を介した直接および間接的な相互作用が多種共存を促進するメカニズムとして重要であることを、「地球共生系シリーズ」の1巻、2巻、4巻、5巻の中で、種間相互作用のさまざまな側面から考察しています。

「北海道大学低温科学研究所」にて

1992年に北海道大学低温科学研究所に移りました。ここでは植食性昆虫を中心とした集団生物学の研究とともに、植物と動物の相互関係を院生やポスドクの若い仲間たちとさまざまなシステムを対象にして取り組んできました。栄養段階の「たて」の関係と「よこ」の関係に注目して、これまでに考えてきたアプローチを野外において実践してきました。中でも、ヤナギをめぐる生物間相互作用の研究を一つの核にしています。ヤナギはさまざまなタイプの昆虫が利用し、これに対して、多様な化学的防衛手段を進化させていることで有名です。また、ポット植えによる実験的操作も簡単に行える、都合の良いモデル植物です。1997年からは新プロ「生物多様性」のプロジェクトに「被食防衛班」として加わり、植物の防衛戦略が創り出す直接的、間接的な生物間相互作用と共進化の解明を目指してきました。

「京都大学生態学研究センター」にて

京都、滋賀、北海道を巡ってまた京都（ふりだし）に戻ってきました。センターに移ってまだ3ヶ月半しか経っていません。その間も札幌と大津を頻繁に行き来しており、腰を落ち着けるにはほど遠い状態です。センターも時限まであと2年。赴任早々に、次の職場を探し始めねばなりません。これまでいろいろ職場を移りましたが、時には環境を変えるのもリフレッシュになりよいものです。センターではこれまでの経験を活かし、デモグラフィーに基づく個体群アプローチによって、種間相互作用と生物多様性にかかわる種々の問題に取り組んでいくつもりです（テントウムシのデータはまだ3割ほどしか使っておらず、論文のネタはまだありますが、そろそろ收拾しないとドングリやヤナギの論文が書けなくなってしまいそうです）。少し落ち着いたたら、動物と植物の相互作用に関するセミナーも定期的に持ちたいと考えています。関心のある方は連絡してください。



## 生態研センターの思い出

安井行雄

「あなたの仕事は論文を書くことです．とにかく生態学研究センターの名前の入った論文を書いてくれればそれでいいです．」

これが私が和田センター長に初めてお会いしたときに言われたことでした．おそらく私が今まで何をしてきた人間でこれから何ができるのかご存じなかったのでしょうか，私自身も自分がそもそもどういう脈絡で採用されたのかあまりよく分かってはいなかったように思います．受け入れ先教官の山村教授も，別にどんな研究をしてもいいとのことでした（ただし環境問題がらみの論文を1本書いておいた方が就職には有利かもしれないとは言われましたが）．結局センターには1年3ヶ月しかいなかったで，それなりの仕事はしたものの，反面いろんなことがやりかけのままになっていてその点心残りでもあります．

それまで北海道大学農学部という良く言えば静かで落ち着いているが，悪く言えば刺激に乏しい環境から移ってきたこともあって，センターの毎週（毎日）のようにセミナーがあったり，外国人研究者が来たりという環境は私にとって非常に刺激的で楽しいものでした．また研究分野もそれまで私のまわりにはなかった生態系や物質循環というマクロなレベルに重点が置かれていたので，皆さんの話を聞きながらいろいろと学ぶことができました．その反面，行動生態学・進化生態学・集団遺伝学・量的遺伝学のような基礎的な進化理論とその検証を扱う分野に対する理解は乏しいようでした．現在でも欧米先進国の動向，たとえば Trends in Ecology and Evolution (TREE) 誌の掲載論文のかなりの部分をこれらの分野が占めていることを考えると，ミクロな領域から応用的でマクロな領域までまんべんなくカバーしている先進国との差は明らかです．「生態学研究センター」といっても生態学の全領域はとてもカバーできておらず，しかもあらゆる生態学の基礎である進化生物学を抜きにして生態系や生物多様性などという単語とイメージだけが先行した分野にみんなが踊らされている現状でこれからも大丈夫だろうかと余計な心配もしてしまいます（この件では，お酒の席ですが，安部教授に説教！したこともありました）．

ところでセンターにいた1年3ヶ月にはいろいろな思い出がありますが，そのなかでもベスト3を挙げるとすれば（1）イギリス出張，（2）岩倉ローラー作戦，（3）しごき会ということになるでしょうか．イギリス旅行は98年の8月に東教授のご好意で3週間の武者修行に出していただいたもので，行動生態学の世界的権威であるケンブリッジ大学の Tim Clutton-Brock 博士，リバプール大学の Geoff A. Parker 博士の研究室を訪れ，両巨頭のほか多くの研究者の前でセミナーをさせていただき交流を深めました．

またケンブリッジ市内にある Elsevier 社を訪問し，TREE 誌の編集長 Andrew Sugden 博士・編集者の Catriona MacCullum 博士と一緒にパブでビールを飲みながら，以前私のレビューが同誌に掲載されたときに世話になったお礼を述べ，さらに新しい原稿の依頼を受けました（この3週間に自分でも驚くほどの活動をしました省略）．「岩倉ローラー作戦」というのは私の新しい研究テーマであるハウネンエビの遺伝的多様性の調査のため，センターの院生やPDの皆様のご協力を得て岩倉村松町の水田でおこなったサンプリング調査のことです．合計20カ所の田んぼで丸1日かけて数百個体のハウネンエビを採集しました．現在そのアルコール漬けサンプルからDNAを抽出し，遺伝子流動の推定作業をしています．しごき会は97年と98年の2回参加しましたが，院生の皆さんの研究発表を長時間じっくり聞いて議論したことは，発表する本人のみならず私にとっても非常に有益なことでした．議論好きの私としてはこういう機会はいくらでも大歓迎で，できればこれからも参加したいものだと思います．そ

のほか 98 年の院生行方不明事件の第二次捜索隊に参加したのも忘れがたい思い出です（事件自体はとても残念なことでした）。

あと心残りだったのは、私は京都分室にいたために大津（含む瀬田）の皆さんとはあまり交流できなかったことです。しかし 99 年中に分室も瀬田の新実験棟に統合されると聞いていますので、そうなれば今のような奇妙な分断状態は解消され、もっと相互交流が進むことでしょう。異なる分野の研究者同士の交流が新たな研究分野を生み出すことを期待します。

最後になりましたが、在籍中公私にわたって様々なことでお世話になりました。センターの皆さんの今後のご活躍をお祈りして私の挨拶とさせていただきます。

現所属：環境庁国立環境研究所地域環境研究グループ  
化学物質生態影響評価研究チーム



## 我が回遊人生！

### 奥田 昇

昨秋、上へ下への大騒動だったセンターの移転も無事に終わったと安堵のため息をついたのも束の間、再び引越しをすることになるうとは、、、。平成 10 年 11 月 1 日付けの学術振興会特別研究員採用通知を手にした時、ふと、この 4 年半余りのセンターでの大学院生活のことが頭をよぎった。学部時代、主にミクロ生物学を専門にしており生態学などというものは講義ですらお目にかかったことの無い私が、裸同然で飛び込んだこの世界で未だ研究を続けていようとは、その当時、想像だにしないことだった。もともと生態学を志す動機も不純であった。私の専門は海洋生態学であるが、それも「毎日海に潜って魚が観察できる！」という知り合いの誘い文句に乗せられて、ほいほいと辺境の地・愛媛まで行ってしまったぐらいだ。では、何故いまセンターに居るのかって？答えは簡単。修士時代を過ごした愛媛大学には博士課程が無かったのである。というわけで、臨湖実験所の面影を色濃く残す旧センターの門をくぐることとなった。「海の生態を研究している人間が何故、わざわざ琵琶湖に来たのか？」これが私に対するセンタースタッフの迎調の言葉であった。

私は海産魚類を材料として主に行動生態学的視点から海洋生物の進化について考えてきた。しかし、センターで行動生態学はあまりにもマイナーな分野であった。今、思えばこれが良かったのかもしれない。とある教官が口癖のようにこう言っていた、「日本人は他人と同じであることを善しとするが、欧米人は他人と違うことを誇らしく思う」と。私はこの言葉を発奮材料にして研究に没頭した。しかし、「如何にして皆に面白いと思わせるか？」ということのを忘れることはなかった。そして、結局のところ、皆に理解してもらおうという作業はあらゆる生物に内在する普遍性を見出す過程にほかならないという見解に辿り着いた。幸いなことに、センターには様々な分類群を様々なアプローチによって研究する人たちが集っている。その分野の最先端の話題の 1 つ 1 つが私には魅力的であり、大きな刺激を与えてくれた。そして、これらの知識を糧にさらなる研究の糸口を見出すことに勤しんだ。

センターの掲げる研究テーマは生物多様性の総理解である。しかし、はたして多数の生物の関係を捉えることが多様性研究なのだろうか？あるいは、沢山の生物種が生息する場を研究地とすることが多様性研究なのだろうか？いや、真の多様性研究とはあらゆる角度から、あらゆる手法を用いて生物を包括的に理解することにあるのではないだろうか。その意味において、多種多様な研究者を擁するセンターはまさに「生物多様性研究の中心」といっても過言ではなかろう。多様性研究のリーダー的存在であり、一昨年前、サラワクにて他界した故・井上民二教授が生前によく引き合いに出していたティルマン博士の研究のことが思い出される。生態系の生産性は系内の種多様性が高くなるにつれて増加する。最も生産効率の高い種だけからなる

系が必ずしも総生産量を最大化するとは限らないのだ。彼の残したメッセージをもう一度じっくりと噛み締めてみたいと思う。

これから私は古巣の愛媛大学に戻って新たな視点から海洋生態研究に取り組む予定である。鮭という魚は餌の豊富な海洋でその若齢期を過ごし、十分に成長した後、再び母川に帰って繁殖を行う。このような生活史を送るものを回遊魚と呼ぶ。センターの所在地である滋賀県は近江の国と呼ばれるが、淡海（おうみ）とも書く。不思議なことに琵琶湖水系に生息する魚たちの中には本来、川を下って海で過ごすはずの期間を琵琶湖に降湖して成長を遂げるというユニークな生活史を送るものが多い。これも琵琶湖の持つ高い生産性と何者をも受け入れる懐の深さがあればこそなせるのであろう。ちっぽけな魚にとって琵琶湖は海と呼ぶに相応しい大きな存在であったにちがいない。ふと、来所した頃のことを思い出す。私にとってセンターでの4年半はまさに成長期であったのかもしれない。

#### 謝辞

最後に、これまでお世話になったセンターの教官、事務官、学生諸氏にこの場を借りてお礼を申し上げます。とりわけ、学位を取得してからの1年程、生活に困窮し研究に対するモチベーションが低迷した時期に叱咤激励して下さった方々には感謝の言葉では語り尽くせない思いがあります。センター構成員数は現在も増加の一途をたどっていますが、とかく組織が肥大化すると人間関係は希薄になりがちです。誰もが分け隔てなく語り合える、そんなセンターの雰囲気だけはいつまでも変わらずにいて欲しいと願います。それでは皆さん、短い間でしたが本当にありがとうございました。

現所属：愛媛大学理学部 生物地球圏科学科生態学講座



## 折々の景色

### 山田佳裕

私は湖沼生態系を研究対象のひとつにしているため、船で湖上に出て仕事をすることが多い。京都大学生態学研究センターに在籍中は主に琵琶湖をフィールドとして研究活動を行った。琵琶湖は大きく2つの気候区分にまたがり、北部は日本海性気候、南部は瀬戸内海性気候に属している。そのため、琵琶湖は四季を通じて様々な景色を見せてくれる。特に、冬の北湖は天気の変化が激しく、それにとまなう景色の変化も多様である。

私が琵琶湖で最初に船に乗ったのは、センターに来る前の修士の院生だった頃で、滋賀県琵琶湖研究所が行っている北湖への雪融け水の流入についての調査をお手伝いさせて頂いた時であった。調査地点の一部である竹生島-長浜-今津の内側の水域は北よりの風が吹くと三角波が出来るため、風が強いと出航出来なかった。朝、晴れていて出航しても昼から天気が急変することもしばしばであった。だか、こういった時に感動的な場面に出くわす。竹生島のあたりから塩津湾を北上中に天気が急変し、北風が吹きはじめると、北から鉛色の雲が広がり始め、空に彩かな白と黒のコントラストが現われる。湖上でも北風が到達しているところは波で黒色になり、それが船に向かって進んでくる。この様子はなかなか観ることは出来ないが、琵琶湖でみられる最も荘厳な景色ではないかと思う。センターに来てからも船や車で週に数回のペースで琵琶湖に出ていた。調査中、深い霧に包まれて動けなくなったり、突風に吹かれたりと色々なことがあったが、湖の様々な顔を見ることが出来た。

頻繁に湖に出ていると、まず、季節の移ろいが感じられるようになり、気象変動などの湖の生態系を取り巻く環境の変化に敏感になる。そうすると、雨、風といった気象情報などは自然と頭の片隅にとどまる様になる。そうして、湖に出て五感を研ぎ澄まし、湖を見ることで、生

態系の状態を描けるようになる。これが私の生態系解析の原点であり、研究上の判断もこうした事から得られる情報に拠っていた。

現在は環境問題が騒がれるようになり、生態系の評価、管理、保全に関する研究が色々な分野で盛んに行われている。しかし、この種の研究は人間社会の視点から生態系を解析し、評価を行うケースがほとんどの様に見受けられる。人間が自然界の中で生存していく道を探るためには生態系の視点からの情報発信や評価が必要である。科学的な視点からそれが出来るのは生態学者を含めた自然科学者である。自然界の一員として生態系を理解するには、我々の視点を生態系の視点に近づける必要がある。野外で五感を研ぎ澄まし、そこから様々な情報を取り込むことは自然科学者にとって益々必要になる。これが、自然の中で生きて行くための良策を提言することにつながるのである。

最後になりましたが、京大大学生態学研究センターの皆様には在籍中、公私にわたりひとかたならぬお世話になりました。深くお礼を申し上げます。また、センターの益々の発展を心よりお祈り申し上げます。

科学技術振興事業団 科学技術特別研究員  
(水産庁養殖研究所勤務)

---

## 🌻🌻🌻🌻🌻 国際シンポジウムの報告 🌻🌻🌻🌻🌻

### BICER, BDP and DIWPA Joint International Symposium on Lake Baikal

#### 河合崇欣(日本BICER協議会事務局)

BICER, BDP and DIWPA 合同バイカル湖に関する国際シンポジウム、無事終了。今年には1988年にバイカル湖地域における国際共同研究が開始されてから10周年にあたる記念すべき年です。また、今回のような本格的国際シンポジウムは1993年にイルクーツクで開催されて以来5年ぶりです。残念ながら、ロシア科学アカデミー・シベリア支部議長ドブレツォフ教授の参加は実現しませんでした。本会議では、64名の外国人を含む150人の参加者から口頭、ポスター合わせて約150題の研究発表がありました。これに相前後して1つのサテライトシンポジウム、3つのワークショップが持たれました。各国とも着実に研究成果をあげており、最近バイカルならではの新しい発見が所々で見られるようになってきました。また、今回は、欧米の仲間にとっては、日本の研究グループの研究内容と成果を包括的に直接知ることが出来たことで、今後の国際共同研究の新たな展開を考える上で重要な機会となりました。

シンポジウムを締めくくる国際交流の場、パンケはベイブリッジを眺めながらの船上晚餐会を用意しました。参加者の満足は大きく、大好評でした。

多くの方々のご支援、ご協力と8年近い研究を積み上げてきた日本の研究者の努力でこのシンポジウムが開催され、盛況の内に無事終了できたことによって、日本の研究グループの権威が確かなものになったことを実感しております。関係者の方々に、感謝致します。

(日本BICER協議会事務局ニュース No.70 より)

---

1998年度・1999年度京大大学生態学研究センター  
協力研究員 (Guest Scientist) 追加リスト

氏名	所属	研究課題
山田佳裕	水産庁養殖研究所	安定同位体精密測定法を用いた五ヶ所湾の生態構造の解明 - 自然生態系に及ぼす養殖漁場の影響 -

✿✿✿ 編集後記 ✿✿✿

- あわただしい年度末ですが、雪景色のセンターは静かな雰囲気です。
- ニュースでは全員を紹介することができませんが、今年度もたくさんの院生や特別研究員の方がセンターを去って行きます。
- 皆様からの記事をお待ちしています。

(杉本敦子)

✿ 今後のスケジュール ✿

センターの行事

1999年

- 3月 センター・ニュース No. 57 (業績集)
- 4月20日 センター・ニュース No. 58
- 6月20日 センター・ニュース No. 59
- 8月20日 センター・ニュース No. 60

センターあるいは京大環境フォーラム、DIWPA 関連の研究会

1999年

- 3月12日～13日 公募研究会「水循環と植物の関わり - 水の安定同位体比を用いた研究 -」(大津)
- 3月16日～19日 公開セミナー 日本学術振興会 重点研究国際協力事業 Workshop on 「Biodiversity and ecosystems processes: spatial and trophic considerations」(京都・芝蘭会館)

関連分野の研究会・シンポジウム

1999年

- 3月27日～30日 第46回日本生態学会(信州大学、松本)
- 5月7日～13日 第2回 IGBP Congress(神奈川・湘南国際村)
- 6月24日～26日 Open Meeting of the Human Dimensions of Global Environmental Change Research(神奈川・湘南国際村)